

# 第3章 第1次中東戦争

## 第1幕

### パレスティナ争奪戦の始まり

#### 第1次中東戦争の勃発

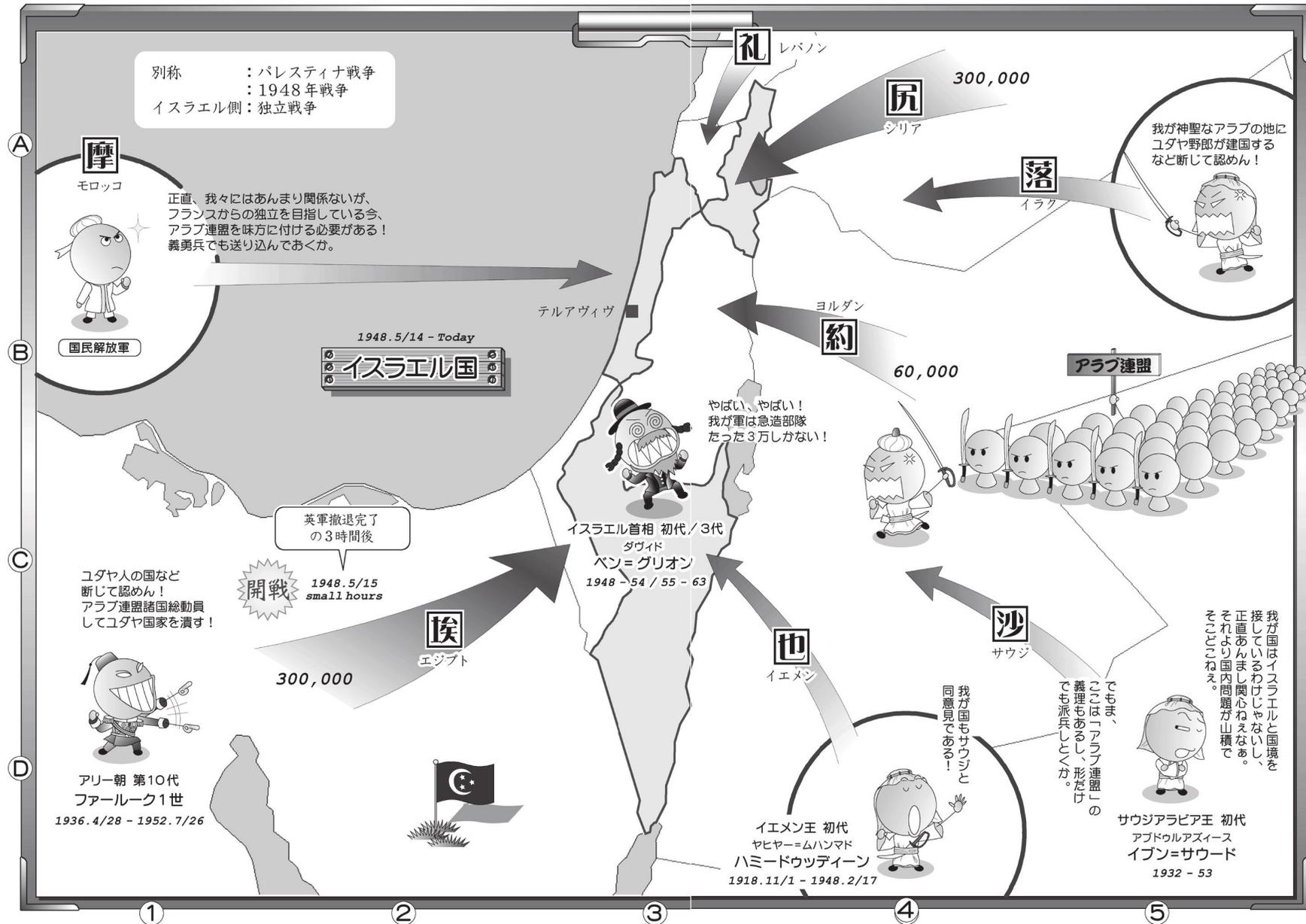
ついに「第1次中東戦争」は勃発した。アラブ陣営の圧倒的物量を前にして、開戦前の大方の予想は「アラブ陣営の圧勝!」「イスラエルは短期で大敗!」であったが、蓋を開けてみれば、アラブ陣営はいところなく敗走を重ねる。ここから「アラブvsイスラエル」の血みどろの戦は幕を開けることになった。

我が神聖なアラブの地に  
ユダヤ野郎が建国する  
など断じて認めん!



# 〈第1次中東戦争の勃発〉

1948年



- 第1章 大戦中・大戦後のイスラーム
- 第2章 中東戦争前後
- 第3章 第1次中東戦争
- 第4章 第1次中東戦争後
- 第5章 第2次中東戦争
- 第6章 第3次中東戦争
- 第7章 第4次中東戦争

イスラエルが「独立宣言」を出したのは、1948年5月14日の午後4時、英駐留軍がパレスティナからの撤退を完了したのが、その日の深夜のことでしたが、「アラブ連盟<sup>(\*01)</sup>」(B/C-5)はそのわずか3時間後(C-1/2)には早くもイスラエルに侵寇します。

これが所謂「第1次中東戦争」——別名「パレスティナ戦争」「1948年戦争」、イスラエル側が「独立戦争」と呼ぶ(A-1/2)、現在に至るまで燻りつづける“パレスティナ争奪戦”の始まりとなりました。

「アラブ連盟」というのは、すでに見てまいりましたように、大戦末期の1945年3月、「アラブ諸国の利害を守る」ことを掲げてエジプトの提唱により結成された国際組織です。

その原加盟国を地図で確認してみますと、エジプト(C-2)・レバノン(A-3/4)・シリア(A-4)・イラク(A-4/5)・ヨルダン(B-4)・サウジ(C-4/5)・イエメン(C-3/4)と、パレスティナをぐるりと取り囲むようにして並んでいることがわかります。

この7ヶ国にモロッコ(A-1)まで加わって<sup>(\*02)</sup>、イスラエルは文字通り“八方”からの総攻撃を受けることになったわけです。

しかもイスラエルは、まだ「独立宣言」から半日も経っていない状態で、国造りも固まっていない、軍備も整っていない、兵も少ない(3万)という三重苦の状態。

それに引き換え「アラブ連盟」軍は開戦当初の動員数だけでも15万、最終的には南から埃軍が30万、北から尻軍が30万、東から約軍が6万、その他諸々で総計70万という大軍で襲いかかったのですから、イメージ的には「生後間もない赤ちゃん(イスラエル)に大の大人(アラブ連盟)が8人がかりで殴りかかってきた」という感じでしょうか。

(\*01)本書「第1章 第2幕」を参照のこと。

(\*02)当時のモロッコは連盟加盟国ではありませんでしたが(のちに加盟)、このころフランスからの独立を考えており、「アラブ連盟」を味方に付けておきたいがための派兵でした。

(\*03)兵力だけで比べるなら、アテネは陸(マラ톤の戦)に海(サラミス海戦)にペルシア帝国に連戦連敗し、「アテネ帝国」が出現する前に亡ぼされていたでしょうから。

「兵数」だけで見れば、到底イスラエルに勝ち目がないように見えます。実際、開戦前の勝敗予測において、当時の専門家・分析家といった知識人も、政治家・外交官といった政界人も、報道陣らも皆一斉に「アラブ陣営の圧勝!」「イスラエルは短期で大敗!」と予測したものでした。

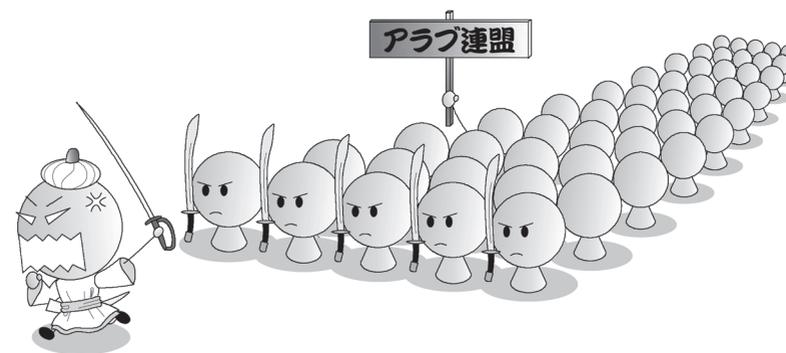
しかし、それらの予測はものの見事に外れることになります。

戦の勝敗というのは兵数のみで決するものではありません。

戦の勝敗が「数」で決するのなら、古代ギリシアではアテネが「アテネ帝国」などと称される繁栄を見ることなく亡んでいた<sup>(\*03)</sup>でしょうし、中国では曹操が三国の一角を成すことはなかったです<sup>(\*04)</sup>、インドではムガル帝国が生まれることはありませんでした<sup>(\*05)</sup>し、日本は20世紀に入って早々にロシアに亡ぼされて<sup>(\*06)</sup>今の日本は存在しなかったでしょう。

兵の数のみで結果がわかるのなら、わざわざ凄惨な殺し合いを演じなくとも、あらかじめ兵の数を数えて少ない方が白旗を振ればいだけのこと。

現実にはそうしたことはなく、戦争の勝敗は、将才・士気・兵の練度・兵器



(\*04)「官渡の戦」では、袁紹軍10万と曹操軍1万(正史『三國志』より)がぶつかりましたが、ここで曹操が敗れていたら、華北の覇権を握っていたのは袁紹だったことでしょう。

(\*05)ムガル帝国を建国に導いた「第1次パーニパットの戦」では、ムガル軍1万2000に対し、敵(ロディー朝)軍は10万以上というかなりの兵力差がありました。

(\*06)もちろん「日露戦争」のことです。

の優劣・兵站・戦術・戦略、さらには同盟国の有無・多寡、地の利・天候に至るまでありとあらゆる条件の総合点で決まります。

「兵の数」などこれら多くの要素のうちのひとつにすぎません。

「勝敗予測」をする際には、上に挙げたような条件を広く広範に検討しなければならないのに、学者というものは自分の専門分野以外のことには疎いことが多く、そのため自分の狭い専門分野（兵力、兵器など）のみで比較するから外すのです。

どんなに士気の高い大軍を擁しようと、それを率いる将が無能では兵はただただ屍を重ねるばかり(\*07)ですし、数ばかりが多くとも兵の練度が低くては将の思い通りに動いてくれず役に立ちません。

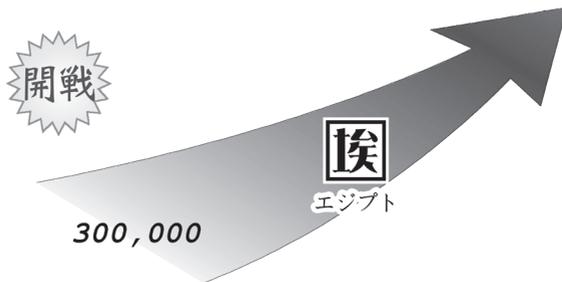
ならば、「優れた将」と「士気も練度も高い兵」が奮戦すれば勝てるかといえ、大本營の立てた戦略が間違っていればやはり勝てません(\*08)。

また、地形を活かした作戦、天候ひとつで戦果が逆転などということもよくあることです(\*09)。

ユダヤ人の国など  
断じて認めん！  
アラブ連盟諸国総動員  
してユダヤ国家を潰す！

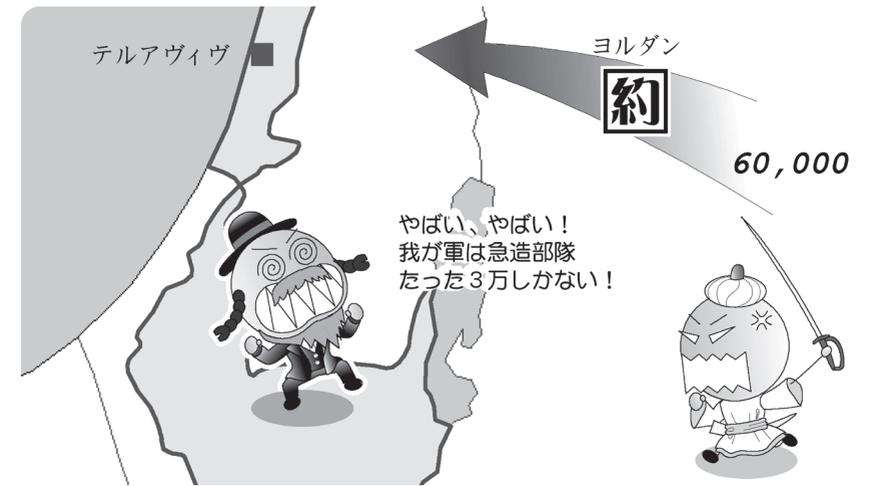


アリー朝 第10代  
ファールーク1世



(\*07) 日清戦争のときの「平壤の戦」などはその好例。

(\*08) たとえば、「日中戦争」から「太平洋戦争」にかけての日本軍部。



たとえ物量では勝てなくても、同盟国を付けることで逆転できることもあります。

こたびも「兵力」だけでみれば、圧倒的兵力差がありましたが、「連盟軍」にも弱味はありました。

それは「連盟軍」の兵は押しなべて士気が低い、練度も低い、そのうえ兵器も旧式のうえ準備不足で兵站も調べていませんでしたし、さらに、連盟各国の連携もなく各個バラバラに動くばかりで統一的戦略が立っていないという、ほとんど褒めるところが見つからない散々な内容で、さらにいえば、サウジアラビア・イエメンに至っては「連盟の義理を果たすため形式的に兵を出しているだけ」でやる気なし。

いくら兵の数で勝っていても、これで「勝て」という方が難しい。

もちろん、こうした内情は埃軍部もよく理解しており、こたびの開戦にも軍部は反対していたのですが、その反対を押しつけて強引に開戦に持ち込んだのが埃王ファールーク1世(D-1)です。

(\*09) 日露戦争は、陸では「鴨緑江の戦」「奉天会戦」、海では「黄海海戦」「日本海海戦」などまさに「天(天候・幸運)が味方した」としか思えないほどの僥倖の連続でした。

当時のファールーク1世は、先の大戦での失態<sup>( \* 10 )</sup>で国民人気は地に墮ち、  
軍部からの支持も失って「肉風船」だの「腐ったメロン」<sup>( \* 11 )</sup>だのとさんざんに  
陰口を叩かれるようになるなど、苦境に立たされていたためです。

いつの時代も、政府が国民の不満を逸らしたいと思ったとき、もっとも簡単  
でもっとも効果があるのが「戦争」です。

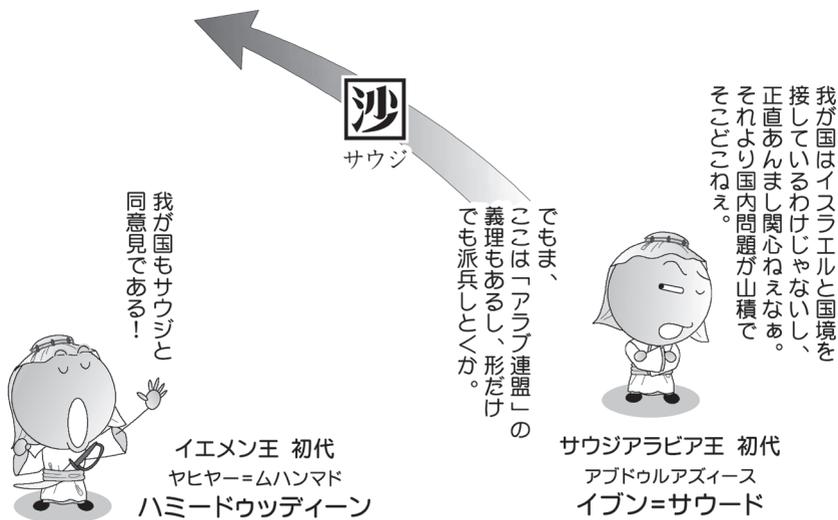
背にでかでかと「正義」と書かれたコートを羽織って口先で「平和!」を叫ぶ  
アメリカが、大統領選挙が近づくたびに好戦的になるのもそのためです。

戦争さえ起こせば、そしてその戦争に勝ちさえすれば、いつの世も国民は一  
斉に政府を支持するようになるからです。

つまり、エジプトがたびたびの開戦したのは、「パレスティナ人のため」という  
のはあくまで「建前」、じつは国王<sup>ファールーク1</sup>の保身のためだったのです。

参戦の動機は不純、軍部は戦意なく、兵士は士気が低い。

これでは勝てる戦も勝てません。



( \* 10 ) 本書「第1章 第2幕」参照。

( \* 11 ) 肥満体であったことから。